

実践記録の部

書く意欲を育てる作文指導はいかにあるべきか

足利市立北郷小学校

1. はじめに

本校では、基礎的な学力の向上をめざして、過去2年間（50，51年）現職教育で国語科を取り上げ「文章を表現に即して、正確に読みとらせるための指導はいかにあるべきか」という主題のもとに研修してきた。52年度からは、読むことの指導の上にたち、作文の指導法へとさらに研修を進めることになった。よく「読解力をつけるためには、作文を横目で見ながら読みとらせることが大切だ」といわれている。それは、書き手の立場にたち、文章を読むことによってはじめて正しい深い読みができることを意味している。読むことと書くこと（理解と表現）が、表裏一体となって、真の国語力も生まれてくるだろう。

そうした考えにたち、52年度、53年度と、作文の指導の研修を進めてきた。

2. 主題設定の理由

幼児の頃から、テレビの影響を強く受けて育った現在の子供たちを見ていると、本を読みながら、作文を書きたがらないといった傾向を感じる。文字をたどって本を読むこと、鉛筆を持ってこぼで何かを表現することを嫌う。そして、読むことと書くことを比べてみると、書くことの方が一層嫌われているようである。

そうした文字離れをしている子供たちに作文力をつけるためには、まず、作文を書くことが好きな子に育てなければならない。どうしたら、作文が書きたいという意欲を起し、育てることができるのか。その最も基礎的なことから、研修していこうということで、この主題を設定した。

3. 研究の方法

まず、今、目の前にある児童の作文から出発し、その実態や児童の作文に対する意識を分析する。さらに児童の作文とどう取り組んでいったらよいのかという私たち教師の姿勢を反省しながら、指導法へと研究を進めることにした。

（52年度）

- 児童の作文に対する意識や作文力の実態を分析した。

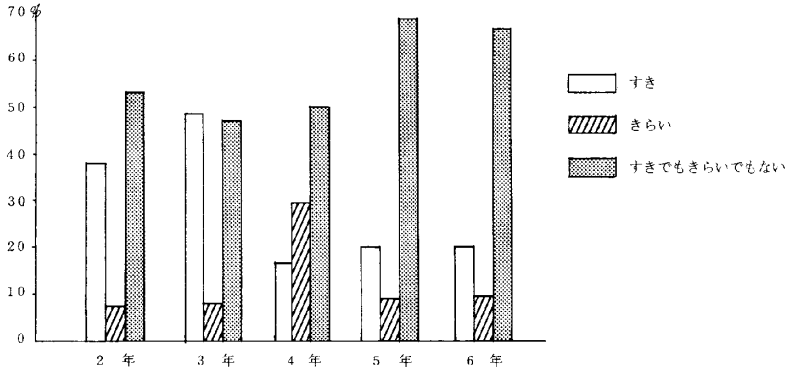
（53年度）

- 低・中・高の三つのブロックに分かれ、発達段階にそった具体目標を設定し、指導法の研究をした。

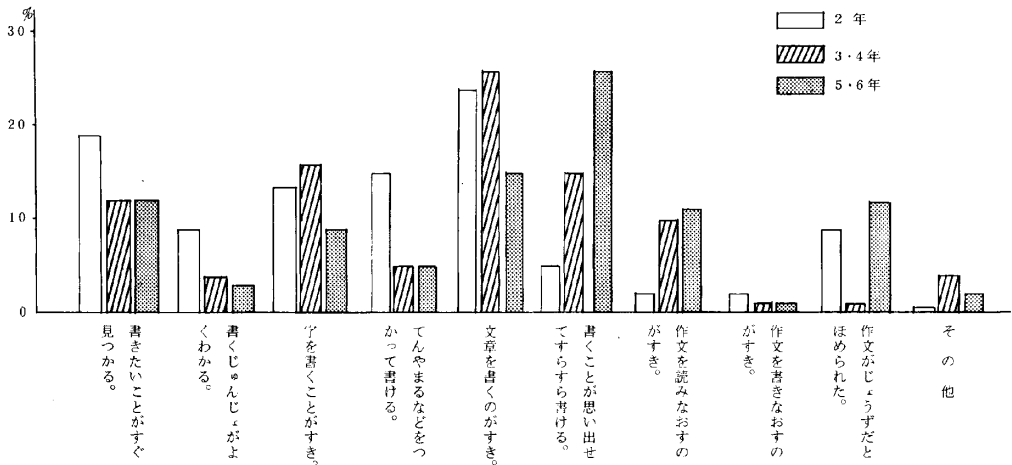
4. 研究の概要

(1) 作文の意識調査の結果（2年生から6年生までを対象とするアンケート）

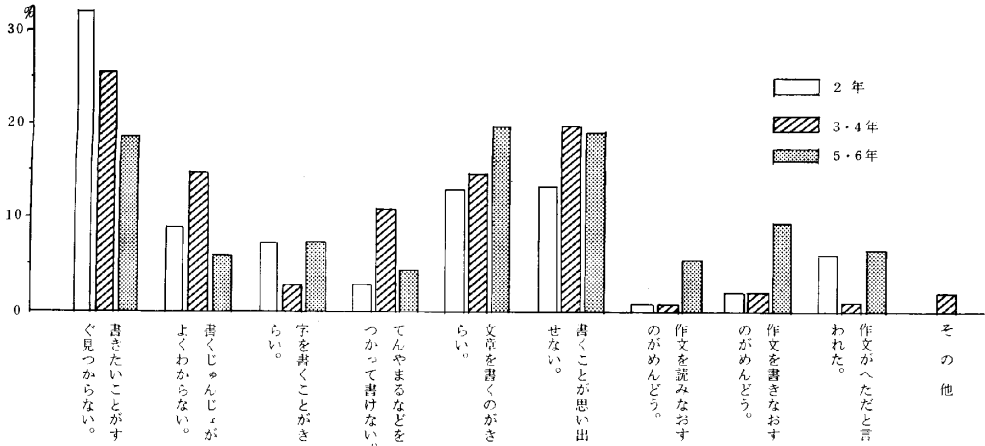
○あなたは、作文を書くことが好きですか。



○作文の好きなわけは何ですか。（作文が好きと答えた児童）



○作文のきらいなわけは何ですか。（作文がきらいと答えた児童）



(2) 作文の意識調査の分析と考察

①作文のすき、きらいの調査から

◦すきと答えた児童について

2・3年生では、40%～50%と約半数の児童は、作文がすきと答えている。4・5・6年になると、20%前後に落ちてしまう。

低学年では、まだ作文に興味をもっている児童が多く、生活日記や、読後のひとくち感想なども意欲的に取り組んでいる。特に字を書くことが得意な女子に、作文のすきな子が多く含まれていた。

◦きらいと答えた児童について

全学年を通じて8%～10%(4年生は30%)がきらいと答えており、割合からいうと4年生を除いて、同じようである。

これを見ると、きらいと答えている児童は意外に少ないが、それらの児童は、文字を書く力も劣り、性格的に情緒の不安定な子や、努力を惜しむ者が多く含まれていた。

◦すきでもきらいでもないと答えた児童について

45%～72%の児童がすきでもきらいでもないと答えており、どの学年も非常に多い。特に高学年になるにつれて多くなっている。この中には、比較的作文の上手な子も多く含まれている。このことから、作文は児童にとって、それほど興味を引くものでないことがわかる。

②作文がすきなわけの調査から

低学年・中学年では、「とにかく文章を書くのがすき」(24%～26%)、次に「文字を書くのがすき」(12%～16%)が多くなっている。高学年になると、「書くことが思い出せてすらすら書ける」(26%)、次に「文章を書くのがすき」(16%)となっている。「書くことが思い出せてすらすら書ける」ということは、書きたいこともすぐみつき、書き表わし方も身につけているため、表現力のあることがわかる。また低学年では、書写力のある児童に作文の好きな子が多かった。

③作文がきらいなわけの調査から

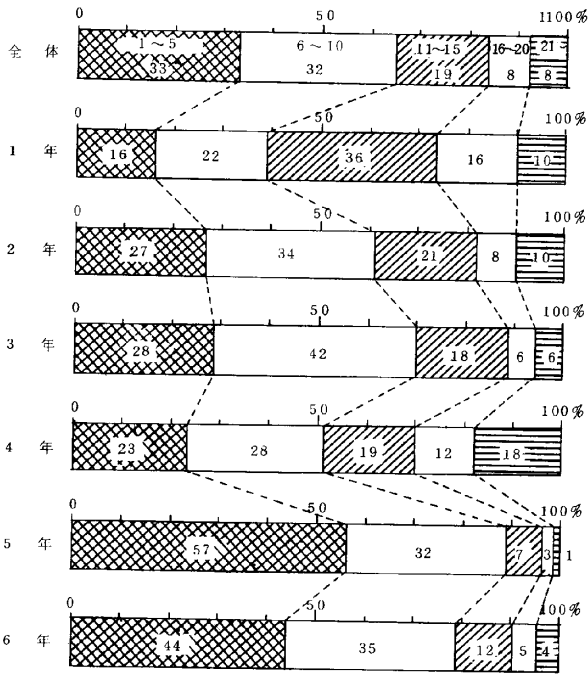
低・中・高のどの学年でも共通していることは、「書きたいことがみつからない」というような取材でつまづいていることである。次に「書くことが思い出せない」「文章を書くのがきらい・へた・めんどろ」が多くなっている。作文を書く以前の準備(書く意欲)がないことが問題になってくる。

(3) 作文の実態調査について

まず、自由な題で作文を書き、その時の①取材の数②その内容③選材の内容④作文の量を分析する。次に共通経験に基づいた作文を書き、低・中・高のブロックで作成したカルテに従って分析する。

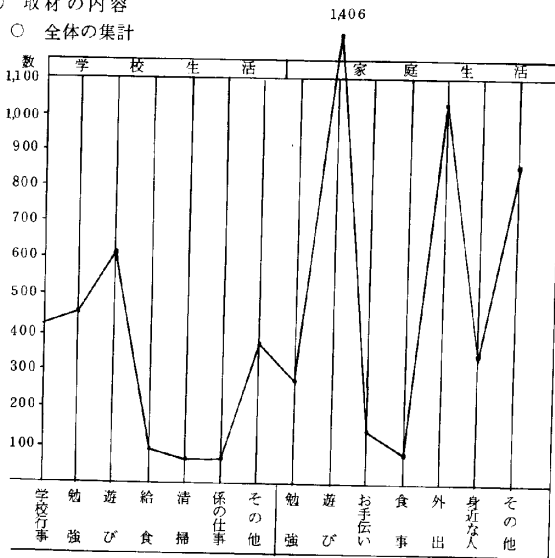
○ 作文の実態調査の集計

① 取材の数

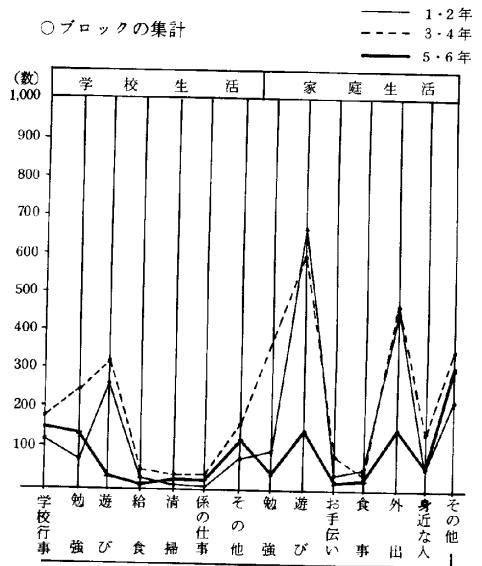


② 取材の内容

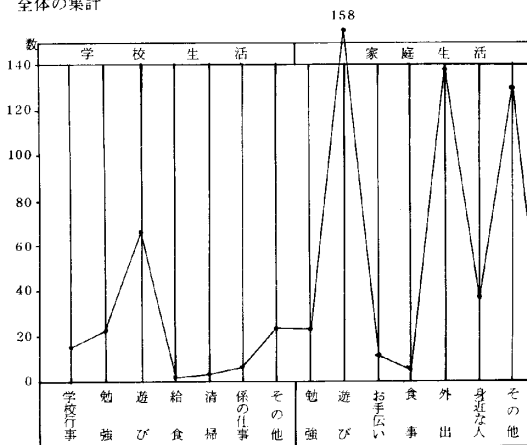
○ 全体の集計



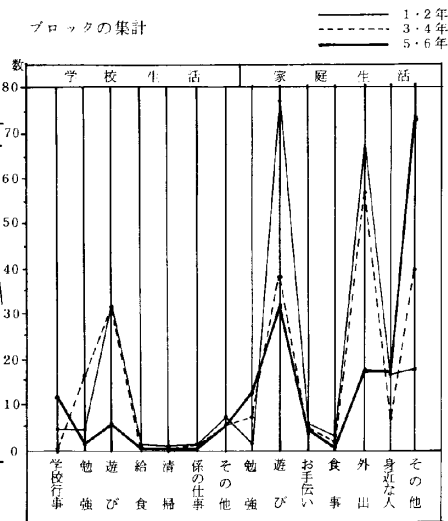
○ ブロックの集計



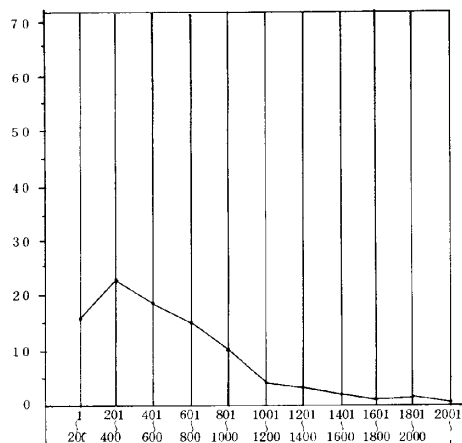
③ 選材の内容
全体の集計



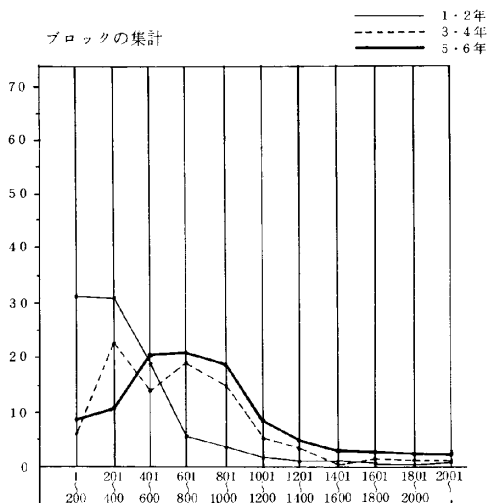
ブロックの集計



④ 作文の量
全体の集計



ブロックの集計



○作文の実態調査の分析

①取材の数 ②取材の内容について

「作文に書きたいと思うことをいくつかでもいいから書いてください。」と投げかけ、作文の題のような形で表記させ、取材の数を調べた。その結果をみると、1年生で(11~15)取材した児童が36%もあるのに対して、6年生では(11~15)取材した児童は12%となっている。1年生などは、作文になるかならないか深く考えず、身の回りにあるものや自分のしたことなどを、どんどん書いたためであろう。内容を見ても、遊んだことの取材が多い。逆に高学年になるに従って、作文に対する意識が強くなり、身構えながら取材していることが考えられる。作文になるかならないかを考えながら取材していくので、数が少なくなっていくのではないかと。

は、作文の取材の範囲をせばめているとも考えられる。どんなものでも作文になること、何をどう書いたらいいのかという指導が、高学年になるに従って、特に望まれることがわかる。

③取材の内容について

「取材した中から最も書きたいことを選んで作文を書いてください。」と投げかけて、作文を書かせた結果、低・中学年とも同じような傾向で、家庭での遊びと外出が多かった。高学年になると、家庭生活の中でもいろいろな題を見つけて書いている。家庭生活のその他が全体の41%となっている。遊びや外出は少なくなっている。しかし、高学年にしては、意見文や感想文がひとつもなかったため、生活文ばかりでなく、他の文種にも、広く取材できるような指導が期待される。

④作文の量について

800字～1,000字位までは、発達段階にそって書ける子の割合が多くなっているが、1,000字を越えると、あまり変わっていない。取材の場合と同じく質的なものが違うので、低学年と高学年をいちがいに比べることはできないが、高学年になるに従って書ける子と、書けない子の差が大きくなっていることがわかる。

○共通経験による作文の実態調査の集計

全学年“運動会”に取材して作文を書かせた。低・中・高のブロック別に作文のカルテを作成し分析する。

・低学年のカルテの例

	観 点
① 構 成	・順序よく書けているか。
② 表 現	・したこと、思ったこと、まわりのようす、会話文などが書けているか。
③ 表 記	・段落・句点・助詞・誤字・会話「。」・漢字・文の接続などが正しいか。

・中学年のカルテの例

	観 点
① 記載面	・助詞・長拗促音・句読点・文章の長さ・漢字の使用率
②文章構成面	・重複文・接続詞・接続助詞・指示語・改行のしかた
③ 内容面	・集中性・統一性・追求性・具象性

・高学年のカルテの例

	観 点
① 構 成	・主題の焦点化・場面の接続・内容の豊かさ・意見・感想
② 表 記	・段落・句読点・助詞・会話「。」・接続詞・漢字・文末表現

ブロックごとに、カルテの観点に従って一つの作文を分析したが、上記のカルテは一つの例であり、実際の作文指導に使うためには、さらに簡単な焦点化されたカルテや教材や文種によって違ったカルテなどを工夫する必要がある。

①低学年の問題点

- ・構成については、80%の児童が順序よく書いていたが、順序性は、低学年の作文の大切な条件なので、できれば100%をめざしたい。
- ・表現についてはしたことが多く書かれていた。思ったことや会話文などが一応書けていた作文は、全体の20%と少なかった。低学年のうちから単にしたことだけでなく、よい作文を読んで豊かな表現へも目を向けさせることが大切になってくる。

②中学年の問題点

- ・記載面では助詞、特に「を」が書けていない。読点の打ち方が正しくできない。漢字の使用が少ないなど基礎的な力が劣っている。
- ・文章構成面では指示語・接続語の語が少なく、使用度が低い。改行のしかたが特にできていない。
- ・内容面では思いつくままのものが多。
- ・その他として、書き出しの工夫・情景描写・語い数などの問題点がある。

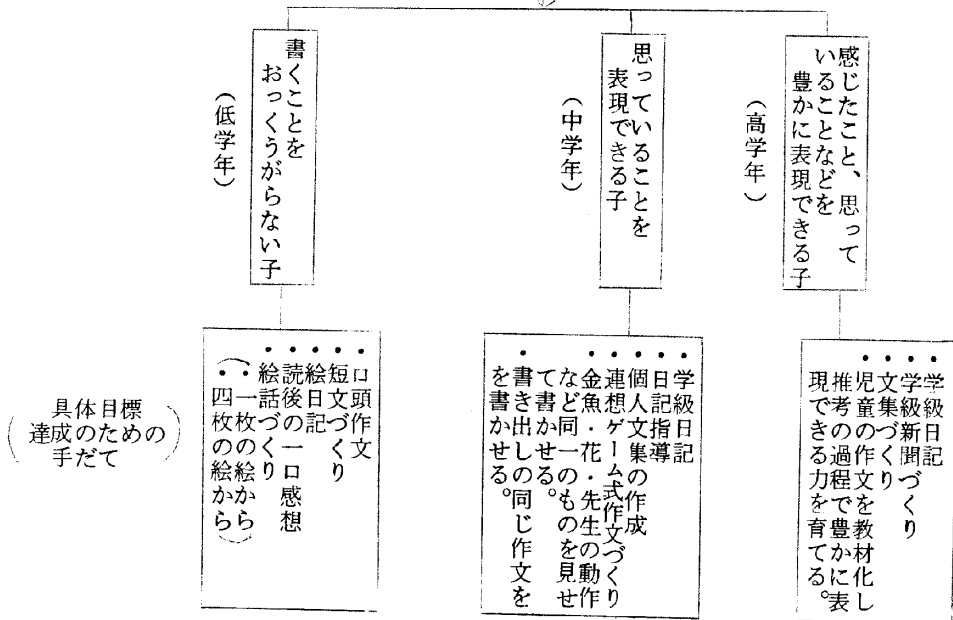
③高学年の問題点

- ・構成については、30%は○であったが半数以上が問題を残している。感じたこと、思ったことなどを豊かに表現できず、読み手に感動が伝わらない。
- ・表記面では句読点や接続詞の使い方にまだ問題が残る状態であり、中学年と同様に基礎的な表記の仕方ができていない。

(4) 低・中・高によるブロック別具体目標と指導の手だて

(主題) 書く意欲を育てる作文指導はいかにあるべきか。

(副主題) なんでも書ける子



(5) 2年指導例

2年4組

1 題 材 おはなし作り

2 題材について

① 本題材は、自由に想像して書く楽しさを味わせるとともに、頭の中にかんだイメージをまとまりのある文章として表現するしかたを理解させる。

② 想像を豊かにして書く表現学習では、1年で1枚の絵をもとにさまざまな空想をして書く学習や、4枚の続き絵を見ながら想像したことを順序を考えて書く学習をしてきた。また、読む領域でも、場面を想像したり、話のすじや展開をおさえて読むことを学んできている。

本題材は、これらを受けて、自由に想像をめぐらせ、豊かな文章表現ができるようにするため設定したものである。

3 児童の実態

① 意識調査 (作文が……)

在籍19名 { 男 8
女 11

	%	人 数	理 由
好 き	74	14	<ul style="list-style-type: none"> ◦ たのしいことが思い出にのこる ◦ いろいろかけてたのしい ◦ 思ったことがたくさんかける ◦ おもしろいことがかける ◦ だんらくに分けてかける ◦ ことばづくりがたのしい
どっちでもよい	5	1(男)	◦ 作文が長くかけない
き ら い	21	4(男)	<ul style="list-style-type: none"> ◦ なかなかかけない ◦ あんまりじょうずにかけない ◦ めんどくさい

作文中何が一番好きか

	一 番 目	二 番 目	三 番 目
感 想 文	0	0	0
お 話 作 り	11	3	1
遊 ん だ 事 件	8	0	8
見 た 事 件	0	13	2
詩	0	3	8

感想文 0の理由

- ① 長くつっこんでかくのでいやだ。
- ② 本を読んでもすぐ忘れて何回も読むのできらい。

- ② 2年生になって学習した作文（経験したできごとを中心にかく）で書く実態や作品を分析してみると、作文学習に意欲的な児童が多くなってきたし、取材も具体的で広がりや深まりが出てきた。

また、自分の書きたいことを決め、関連することがらを集めて、初歩的な組み立てを考えることは、半数程度の児童が理解してきたが、十分習熟していない。

4 学習目標

① 目標

想像したことを順序を考え、自由に生き生きと表現できる

② 指導事項 ※指導事項は学級の能力分析によるものである

- ・ いたいこと、感じたことをはっきり文章に書き表わすこと
- ・ 書こうとすることを集めて順序を決めて書くこと
- ・ 文と文との意味の続き方を決めて書くこと
- ・ 文のおわりに句読点を正しく打ち、確かめること

5 指導計画（4時間扱い）

- | | |
|---------------------------------------|---------|
| ① 想像したことを書くための表現のしかたを理解する | 1時間 |
| ② かかれてある絵をみて、書くことがらを集め、どのように書いていくか考える | 1時間 |
| ③ 各自の構想を発表し合い、それに基づいて記述する | 1時間（本時） |
| ④ 前時に引き続き書き上げ、読みなおして発表し合う | 1時間 |

6 本時の学習指導（ $\frac{3}{4}$ 時取り扱い）

- ① 題材 おはなし作り
- ② 目標 どう作文に書くか、組み立てを発表し合い記述できる
- ③ 準備 組み立てを書いたシート、OHP、作文用紙
- ④ 展開

学 習 活 動	時 間	活動の形態	指 導 上 の 留 意 点	備 考
1. 本時の目あてについて話を聞く	15(分)	個別の思考をもとに想像した話の組み立てをみがき合う。	◎組み立てを発表し合い 自分の組み立てを見なおして、実際に書く学習であることを理解させる	組み立てシート
2. どんな話にするか、組み立てを発表しあって聞く ・どんな話にしようと考えているか ・どんな事がらを集めて組み立てているか		交流学習	◎組み立ての発表を聞いて、話し合う観点をもたせる ・自分の想像と友だちの想像を比べて、発表を聞くようにする ・おもしろさ、豊かさに着目させる	

3. 各自の組み立てをみなおす。	20	みなおした組み立てをもとに記述する 個別学習	<ul style="list-style-type: none"> • 書きたいことと、書くこととの関連を考えさせる ◎たくさん書くことの考えられた児童には、その中で特にくわしく書くことを2~3位の場面にしぼって書かせるような助言をする ※個人カルテに基づき、個別指導をする 	OHP
4. 組み立てをもとに記述する			◎記述中停滞している児童には、サインブロックを使用させて指導する	作文用紙
5. 書いたところまで発表する 2~3名	5		◎書いたところまで発表させ、次時の記述学習へ意欲をもたせるようにする	

7 評価

- 想像文の組み立てをみがき合い、意欲的に記述させる指導はこれでよいか。

個人カルテ

出席番号	児童名	文章を書く態度、習慣			組み立てと文章構成			文章内容の論理的接続		
		前回	指導	今回	前回	指導	今回	前回	指導	今回
1	H A	◎			△	文の組み立ての順序を考えさせる		△	前の文から読みなおして書かせる	
2		◎			◎			△		

(6) 3年指導例

3年2組

1. 題材 ようすが目に見えるようにいきいきと書く
2. 題材について

3年生になると、表現力もかなり伸びてくるし、子どもの生活圏（行動半径の広がり）も大きくなる。反面、行動的になってくるので書くことをめんどろがる傾向もあるが、日記の指導などで書く視点を教え、さらに題材のとらえ方を指導すると豊かな表現をする児童が多くなってきた。

書かせることで事実をくわしく見つめたり、考えさせたりすることは、この学年の児童にとって極めて大切なことだと思う。とすると、文章表現の指導もたんなる事実の羅列にとどまらせておだけでなく、よく見、聞き、考えさせる方法を取り入れていくことに大きな意義があると思われる。

3. 児童の実態

在籍 42人(男22人,女20人)

	人数	%	主な理由
好き	4	9	・思い出として残る。 ・両親や先生にほめられた。
好きでも嫌いでもない	15	35	・書く題材によってかわる。
嫌い	23	56	・書こうとすることが思い出せない。 ・長く書けない。 ・時間がかかる。 ・書いているとつかれる。

4. 学習目標

- 物を見る目、感じとる心、気づく態度を育てる。（取り立て指導の目標）
- 段落に注意して書かせる。

5. 指導計画（6時間扱い）

- | | | |
|---------------|-------|-------|
| (1) 学級日誌を書こう | 1 / 6 | |
| (2) 日記を書こう | 2 / 6 | |
| (3) 先生のように書こう | 3 / 6 | |
| (4) 花を見て書こう | 4 / 6 | |
| (5) 金魚を見て書こう | 5 / 6 | …… 本時 |
| (6) みんなで遊んだこと | 6 / 6 | |

6. 本時の学習

- | | | | |
|--------|------------------|------|--------------|
| (1) 題材 | 水そうの中で泳ぎまわる金魚 | | |
| (2) 目標 | 金魚のようすをいきいきと書かせる | | |
| (3) 準備 | 水そうの金魚 | 原稿用紙 | OHP RISO FAX |

(4) 展 開

学 習 活 動	学習形態	指 導 上 の 留 意 点	備 考
1. 本時の学習の目あてを持つ。 2. 水そうの金魚を見る。	交 流	○ 金魚を見てようすをくわしく書く学習であることをおさえる。 ○ 金魚のようすをよく見させる。 ・泳ぎ方・えさの食べ方 その他	・水そうに入った金魚
3. 書きたいことを発表する。	学 習 10分	○ 発表したことを板書し、それをもとに各自の構想をまとめていくようにさせる。 ○ 多くの児童の書きたいことをとりあげる。 ○ 段落に注意させる。 ・段落ごとに色カードで分ける。	・カード ・泳ぎかた ・えさの食べかた ・思ったこと
4. 各自書きたいことを書く。	個 別 学 習 13分	○ 板書をもとに推こうしながら原稿用紙に書いていく。 ○ 段落の書き出し、一字下げを注意する。 ○ 書き終わった人は、誤字脱字などを直す。 ○ 机間巡視により、児童の作文の実態を把握しておく。	・原稿用紙
5. 友だちの書いた作文を聞き話し合う。 ・ 金魚のようすがよくわかるところ ・ いきいきとしているところ	交 流 学 習 12分	○ 児童の作文を取り上げ読ませる。 ・ ようすがくわしく書けているところを発表させる。 ・ OHPで写して、表現のよさに気づかせる。	・RISO FAX ・OHP
6. 各自の作品を推こうさせる。	5分	○ 金魚のようすがくわしく書けたか、見直しさせる。	

(7) 5年指導例

1 題材 感じたこと思っていることなどを豊かに表現できる。

2 題材と児童の実態と具体目標

国語科の改訂の基本方針の中にも言語による表現力の育成が重要であることが指摘されている。昨年から作文力の向上を図るために、児童の作文の実態を把握し、適切な指導を行うために種々の方法を試み、行ってきた。その過程で言えることは、児童の文章は平板で深みがない。高学年になっても児童が遭遇した事実だけをそれからそれへと羅列的に記述しているだけで、心の動きなどを豊かに表現するすべを知らないため、読み手に感動を与える文章が書けない。読み手に感動を与える文章を書くには、単に経験した事実だけを書くのではなく、その事実をめぐる自分が何を感じどう考えたかを効果的に表現できなければならない。そこで、高学年ブロックでは、国語科の新指導要領の5・6年の表現の目標もふまえて「感じたことや思っていることなどを豊かに表現できる子」という研究の具体目標を設定して、その指導の方法を研究した。

3 指導の過程と内容

(1) モデル作文のよさを十分意識させる指導……………2時間

- ① 事実の羅列だけの作文と「弟のやけど」のモデル文(一部)とを比較し、モデル文がなぜ深みのあるよい文章であるかを話し合う。
- ② モデル文は、単に事実の羅列だけでなく、その事実に遭遇した時、心に感じたことや考えたことなどが書いてあったり、事実ではあるが、その時の気持や情景などをよく表現しているのて読み手に感動をあたえるよい文であることに気づかす。

③ 「弟のやけど」(5年の教科書

教材を次の三つの観点に従って右記のように分析し、観点②・③が心の動きなどを表す豊かな表現で、作文を深みのあるものにして

ことに気づかす。特に、③の重要性を意識化するように指導する。又、これが構成メモとなることを④で指導する。

行くぶ弟 つのさは た医つ母 。院てに に近お	事 実 の 部 分 ①
● が食 たた三卓 。まばの まい上 にひに なえみ ってそ て置汁	○ ○ 私 ら自まは れ分ら心 胸のな配 が責かで つ任っ まがた。が っ感。が た。止
分く時事③ あの実● ら気は わ持は れやある て情る い景が るがそ 部よ	部た時そ② 分たこにの 分と感じ がが事 書たに いこで てとあ あ考っ るえた

④ 「弟のやけど」を上記のように分析することを通して、構成メモのあり方も学ばせる。その際、特に中心段落には②③の観点を十分記述することや、中心段落と題との関係を指導する。

(2) 遠足の作文を下記のようなねらいで構成メモを作成して書かせる。……………1時間

ねらい——心の動きなどを豊かに表現した深みのある作文にするため、事実だけでなく、その事実に遭遇したとき感じたことや考えたこと。又、その時の気持や情景をよく表現し、読み手に感動を与える文章を書く。

構成メモ——事実を中心に、上記3・(1)・③のように、観点②③も十分書く。

(8) (2)での児童作文「渡良瀬に行って」を全員に下記の『作文の評価の観点』に従って検討させる。

……………1時間

① 作文の評価の観点

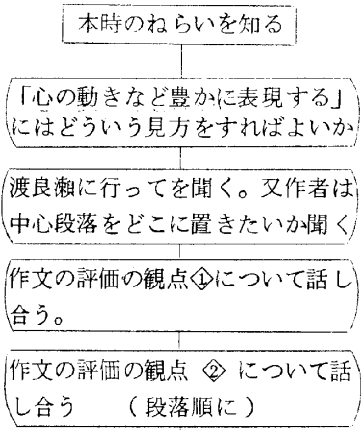
- ④ 順序と組み立て(段落の構成)はどうか、事実のあった順でよいか、順を変えた方が効果的か。
- ④ 各段落では事実だけでなく、その事実にてあった時に感じたこと・考えたことやその時の気持や情景を表現しているか。特に、中心段落では上記のことが十分に記述され中心段落が明確になっているか。中心段落と題の関係はどうか。
- ④ 文の書き出しや終わりは効果的に書けているか。
- ④ 記述面での問題はないか(注)特に ④ を重視させる。

② 児童作文『渡良瀬に行って』

「うわぁ、どてが見えた」と思わず言った。もう川原が近くだ。土手を上がると川がきらきらかがやき、木の葉が緑や黄色にかがやいていた。とてもきれいだった。川原ではいろいろな形をした石がいっぱいあった。私が拾った石はさくら石、はちまき石それにすべすべした白い石、その他、いろいろな石を拾った。とても楽しかった。それから水きりをやった。私は友達と競争した。初めのうちは1回、2回はねた。やっているうちに4回、5回もできた。友だちの最高は7回であった。でも、7回はちょっと無理だった。そんなことをしてる間に時間が過ぎていった。「ピーー」と笛がなった。もう帰る時間だ。私は「もっと遊んでいたいなぁ！」と思った。また、7キロも歩くのだ。往復15キロには足にまめができていやになる。歩き出して、ふと顔を上げると美しい山が見えた。足利は本当にすばらしいと思った。都会ではスモッグ問題などで天気のよい時でも空が曇って見えるそうだ。高いビルで山も見えないだろう。

③ 指導の展開

●留意点 ▲大切な児童の発言 ■教師の発言



- 心の動きなど豊かに表現し、読み手に感動を与える文に修正する。
- 上記(1)の作文の評価の観点にもとづいて検討する。特に ④ を重視する。
- 作者に読ませる。
- 水切りの楽しさか、それとも足利のよさか。
- ▲水切りの楽しさを中心段落にしたい。
- 順序は時の流れにそっているか。入れかえる必要はないか。
- ▲「思わず言った」より「思わず叫んだ」の方が土手の見えた喜びが強く読み手に伝わる。
- ▲土手を上がると川がきらきらとかがやいて目の中に飛び込んできた。……私はそんな風を感じたので表現したい。
- ▲水切りが中心なのだから、水切りがなかなかできない様子や、できた時の喜びなど表現する必要がある。

作文の評価の観点③④検討

今までの話し合いをもとに自分の経験も入れて書きなおす。

- 水切りがやっとできたときなんて叫ぶ？
- ▲P₁「やった」P₂「できた」P₃「成功」
- ▲友だちは7回できた。でも7回は無理だった。と直ぐあきらめてしまわないで、もっと食いついていく様子かくとよい。
- そうだね。何回も何回もやったら体はどんな状態になるかな？
- 「ピーー」と鳴った時どんな気持だった？
- あまりふくらませすぎないようにする。中心段落との関係で……

(注)紙面の関係で評価等削除してある。

(4) ま と め

以上のような指導過程を通して、事実だけをそれからそれへと羅列的に記述するだけの状態から7割程度の児童がなんらかの形で心の動きなど感じたことや思っていることを表現できるようになった。まだ十分とは言えず、程度の差も大きいので今後も同じように全児童が同じ体験をしている児童作文(教材にするととき十分な吟味が必要であるが)などの修正を通して感じたこと思っていることなどを「豊かに表現できる子」へと地味ではあるが、——この子がここまで書けるようになった——という小さいが貴重な教師の喜びを原動力に指導を継続したい。

評

昭和43年及び今回の新教育課程において、確かに作文指導に対する関心は高まってきて、その指導時数も増えつつあるが、書かれている児童の作文は質・量ともにまだまだ十分とは言えないようです。その理由の一つとして児童の作文力の実態が正しくは握されていないということがあげられるのではないのでしょうか。このたびの北郷小学校の研究は、2か年間継続研究をし、1年次では、全校あげて児童の作文についての意識・実態調査とその分析、問題点のあらいだしをし、2年次においては、調査・分析の上に立って実験授業を試みているところに特色があります。中でも、実態調査から分析に至る過程において多くの時間と労力をかけ、児童の作文をさまざまな角度から見て、ひとりひとりの作文の姿を正しく理解しようとする様子がみられます。新指導要領の中に「地域や学校の実態を十分考慮して……」とあるように、各教科、領域においても、当然その実態の上に立って指導の手をさしのべる必要があります。そういう意味でも北郷小学校の研究は、今後の作文指導の研究に多くの示唆を与えることになると思います。